令和５年度　核兵器廃絶平和都市宣言事業

「中学生による広島市訪問事業」

文　集

原爆ドーム前にて

会津若松市

は　じ　め　に

会津若松市は、昭和60年８月６日に、日本国憲法の平和精神に基づき、核兵器の廃絶を誓う全世界の人々と相携え、永久平和確立のため、「核兵器廃絶平和都市」を宣言いたしました。以来、「広島市から被爆体験者等を招いての被爆体験講話」や「広島・長崎原爆被災パネル展」、「平和推進フィルム上映会」を開催するなど、様々な事業を実施しています。

この事業の一環として、市内中学生の代表による被爆地広島市の訪問を実施しました。

平和記念公園や平和記念資料館の見学、「ヒロシマ青少年平和の集い」での被爆体験講話及びワークショップへの参加、さらには平和記念式典への参列などを通して、戦争や原爆がもたらした深い悲しみと癒えることのない心の傷を真摯に受け止め、命の尊さや平和への願いを心に刻みました。

その想いを感想文としてまとめましたのでご覧ください。

核兵器廃絶平和都市宣言

核実験、核兵器の使用が人類を破滅に導くことは必至であり、その唯一最大被害者たる日本国民は凄惨な原爆災痕を世界各国に認識せしめてきたのである。

しかしながら、今日なお世界の動きは、核兵器の製造、実験が繰りかえされ、国際情勢も極度に緊張を加え、核戦争の危機をはらんでいることはまことに憂慮すべきことである。

私たちはこのような、人類を脅かす核実験、核戦争の禁止を求め人類の幸福と平和を念願するものである。

ここに会津若松市は日本国憲法の平和精神に基づいて、核兵器の廃絶を誓う全世界の人々と相携え、永久平和確立のため「核兵器廃絶平和都市」であることを宣言する。

昭和60年８月６日　会津若松市

目　次

核なき、平和で幸せな世界へ	会津若松市立第一中学校	中　島　アリス	１頁
広島市訪問を通して	会津若松市立第二中学校	小　沼　玲　音	２頁
広島訪問について	会津若松市立第三中学校	矢　柳　凛　乃	３～４頁
「ヒロシマ」が教えてくれたこと	会津若松市立第四中学校	加　茂　健　琉	５頁
戦争から平和を知る	会津若松市立第五中学校	三　瓶　ひなた	６頁
平和の当たり前	会津若松市立第六中学校	吉　田　新　汰	７頁
広島訪問をして	会津若松市立湊中学校	岡　島　唯　乃	８頁
平和への思い	会津若松市立一箕中学校	神　山　美　桜	９頁
広島市訪問を終えて	会津若松市立大戸中学校	井　上　銀　河	10～11頁
平和の尊さ	会津若松市立北会津中学校	小　林　桃　寧	12頁
僕の使命	会津若松市立河東学園	武　藤　青玖亜	13頁
広島訪問を終えて	会津若松ザベリオ学園中学校	大　塩　袖　司	14頁
「繋がれた」バトン	福島県立会津学鳳中学校	髙　橋　百　華	15～16頁

核なき、平和で幸せな世界へ

会津若松市立第一中学校　中　島　アリス

皆さんは戦争についてどのように考えていますか。

私は戦争を経験したことがないため、あまり現実味もなく、自分には縁遠いもののように思っていました。しかし、今回の三日間の広島市訪問を通して、今の広島から想像できないほど、悲惨で恐ろしい事実を目の当たりにしました。

まず始めに平和記念資料館で見たことについてです。８月６日、リトルボーイと呼ばれる原爆が世界で初めて広島に投下され、一瞬にして約 14 万人もの命が奪われました。一命はとりとめたものの全身にひどい火傷を負った人、水を求めてさまよう人、死の斑点が出ている人、原爆で放射線を浴び、脱毛した子供の写真。そこには目を背けたくなるような当時の様子が展示されており、言葉になりませんでした。

次に、全国から集まった小中高生とのディスカッションと被爆体験講話についてです。ディスカッションでは「あなたにとっての平和とは」と「なぜ核兵器があるのか」について話し合いました。自分では思いつかないような考えが話し合いの中で多く生まれ、とても良い経験になりました。また、被爆体験講話では笠岡貞江さんからお話を伺いました。その中でとても心に残っているのは、「アメリカが憎いんじゃない、原爆が憎いんです。戦争・原爆はいりません。人を不幸にする、幸せを奪っていくんです。これからの世界はみんなにかかっています」というお言葉です。戦争や原爆は、命、幸せ、夢や希望を奪い、人々に大きな絶望を与えたのです。

今は何気なく過ごしていますが、大切な家族や友達がいて、おいしいごはんが食べられて、平穏な毎日を送っていることは、本当はとても幸せなことなのです。それを一瞬で奪ってしまう戦争は二度と起こしてはいけません。そして、決して忘れてはいけません。そのためには、これから日本を担っていく私達が自国だけでなく、世界中の人々に戦争の悲惨さと原爆がもたらす悲劇を伝えていくことが大切だと考えました。私も、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和に向け、今回学んだことをできるだけ多くの人達に伝えていきたいと思います。

広島市訪問を通して

会津若松市立第二中学校　小　沼　玲　音

皆さんは「平和」について考えたことはありますか。僕は今まで、あまり深く考えたことがありませんでした。今回、広島市訪問事業に参加し、平和について深く考える機会となりました。

広島に到着してすぐ、僕は都会的できれいな街だなと思いました。しかし、1945年８月６日午前８時15分、広島に原爆が落とされ、14万人もの人が亡くなりました。その後も、通常の爆弾では発生しない大量の放射線が放出され多くの人に影響を与えました。きれいだと思った街の中で、80年近くたった今でも苦しんでいる人がいるということを知りました。

僕が特に印象に残っていることは、平和記念資料館でのことです。ここには原爆によって亡くなってしまった人の衣服や、物、写真や絵などさまざまなものが展示されていました。これを見て僕は原爆の恐ろしさに驚きました。たった一発の爆弾によって街が破壊される光景は、現実にあったことだとは思えないほど衝撃的でした。今でもウクライナ侵攻をはじめとして世界のさまざまな地域で争いが絶えません。また同じ過ちをくり返すようなことは、決してあってはいけないと思いました。

また、二日目におこなわれたワークショップでは、「あなたにとっての平和とは」と「なぜ核兵器はあるのか」という二つのテーマで話をしました。僕たちの班では「平和とは、自由に夢を追いかけられ、安心・安全に暮らせること」と結論が出ました。そして「核兵器は攻め・守りどちらにも使える二面性があるから存在している」と結論が出ました。しかし、正解・不正解ではなく、様々な地域の方々と平和について考えられたことに深い意味があると感じました。

原爆の悲劇を繰り返さないため、中学生の僕たちにできることは原爆について学び、原爆の恐ろしさを伝え続けることだと思います。被爆者の平均年齢は85歳を超えました。これから先、被爆した方のお話を聞くのは難しくなっていきます。そのため、次の未来を背負う僕たちがしっかり伝えていくことが大切です。

今回、被爆された方の講話を実際に聞いたり、平和記念式典に参列するなど、さまざまな貴重な経験をさせていただきました。これからの人生のために、これからの世界のために、必ず平和の大切さを伝え続けていきます。ありがとうございました。

広島訪問について

会津若松市立第三中学校　矢　柳　凛　乃

「皆さん幸せです」被爆体験証言者である笠岡貞江さんは、体験講話でそうおっしゃいました。大切な人と過ごせること、毎日ご飯を食べられること、勉強ができること、友達と遊べること、夢があること。今私たちが生きるこの時代では普通で、当たり前のことです。しかし、原爆によって、命とともに夢も希望も未来も奪われ、小さな夢を願うことさえできなくなったのだと、笠岡さんは震えた声で話してくださいました。

笠岡さんは当時12歳。私たちと同じ中学生のときに被爆しました。空が青く光ったその瞬間、目の前に初日の出のようなきれいなオレンジ色が広がったといいます。爆心地から3.5キロ離れた、工場の中でした。その後再会できたお父様は、被爆二日後の８月８日に52歳で亡くなり、お姉さまと笠岡さんの二人で、グラウンドで火葬したそうです。兵士以外のひどいけが人たちは治療もしてもらえず、誰にも看取られずに道端で亡くなる人も大勢いたといいます。「地獄」という言葉が浮かびました。私にはとても想像できませんでした。

広島へ訪問した三日間は、私のこれまでの人生に大きな衝撃を与えました。これまで原爆や戦争について、ある程度は理解しているつもりでいました。でも実際には自分の想像のはるか上を行く、残酷で悲しく苦しい現実があったことを知りました。資料館には被爆当時の実際の写真や絵、遺品などが展示されていて、原爆の恐ろしさや戦争を生きた人々の悲しみや苦しみを物語っていました。被爆者の苦しみ、遺族の悲痛な訴え、原爆症の現実。自分は今までこんなにも大事なことを知らずに生きてきたのかと、頭を殴られたような衝撃を受けました。同時に「人として知らなければ、身近な人にもこの事実を伝えなければ」とも思いました。

「戦争はしてはいけない。させてはいけない。そう思ったときが、皆さんの心に平和の灯が灯った瞬間です」平和記念公園や資料館を訪れた際に、ガイドをしてくださった方がおっしゃいました。たとえ核兵器をなくす直接的な力を持たずとも、できることはあります。正しい知識を持ち、身の回りの人に想いを伝えることです。平和の灯火を一人ひとりの心に灯していくことです。今この瞬間の「当たり前」がどれだけ幸せなことか知ること、本当の平和を作るためにはどうしたらいいのか考え、行動することです。私はまず皆さんに、事実と想いを伝えます。

体験講話の最後に笠岡さんは、「これからの世界は皆さんの背中にかかっていますよ！」と私たちにおっしゃいました。平和への願いを、私たちは託されたのです。まずは知ることから、本当の平和に向かって一歩ずつ、歩んでいきませんか。

「ヒロシマ」が教えてくれたこと

会津若松市立第四中学校　加　茂　健　琉

78年前、草木も生えないといわれていたヒロシマには高層ビルが建ち並び、街には緑が生い茂っていてその中からは蝉の大合唱が聞こえてきました。

戦争によってもたらされた悲惨な過去をもつヒロシマでたくさんのことを学んで、核兵器のない平和な世界をつくるための手がかりを得ることができました。

その一つに平和記念公園をガイドの方に案内してもらい、そこで聞いた公園内にある物に込められた平和への願いを知れたことがあげられます。平和記念公園のあまり目立たない場所に置かれた平和の鐘。その鐘には国境のない世界地図がほられていました。これには、平和は世界が協力してつくるものであり、鐘のように誰かが音を鳴らさなくては広まっていかないという意味が込められており、平和は自分たちがつくっていかなくてはいけないと思いました。同じく公園内にある平和記念資料館の中にあった展示物からは、原子爆弾の投下が人々に様々な悪い事をもたらしたと分かりました。とてつもない爆風によって折れ曲がった自転車、全身にひどい火傷を負いながらも水を求め地面を這いつくばった人の絵、８時15分を示し、止まった時計。すべてがこの世界に核兵器があってはいけないことを僕に伝えてくれました。

それだけではありません。実際に被爆した方の体験を聞きました。その方が「あなたたちは幸せです」と言っていました。ただいまと言っておかえりと言ってくれること、勉強を好きなだけできて夢をもてること。今ではできて当たり前のことが戦争および核兵器によって全てが奪われてしまったと言っていました。自分たちが今できていることがどれだけ幸せなことかを感じ取れました。

三日間の短い期間の中で滅多にできない体験をして色々なことを学べました。核兵器の恐ろしさを語り継いでいける人が少なくなっている現状もあるので、自分たちがこの経験を生かして平和な世界を作り上げたいです。そのためにも、平和記念公園の中にある平和の灯火を核兵器をなくすことによって消したいです。

戦争から平和を知る

会津若松市立第五中学校　三　瓶　ひなた

私は今回の広島市訪問事業を通して、大きく分けて二つのことを学びました。

一つ目は、「戦争の悲惨さ」です。今から78年前、８月６日。青空の上から突然、広島に原子爆弾が投下されました。当時広島にいた35万人のうち14万人もの人々が命を落とされたそうです。また、原爆は生き残った人々にも、ケロイドや白血病などの身体的な被害と、大切な人たちを失った悲しみや自分もいつ死んでしまうかわからない恐怖などの精神的な傷の両方を与え、今でも人々を苦しめ続けています。

二つ目は、「平和に対する人々の思い」です。平和記念公園には原爆ドームをはじめ、「平和の尊さ」を次世代へ伝えるつくりが数多くありました。その中でも私が特に印象に残っているのは「平和の鐘」です。これは核兵器と戦争のない、本当の平和共存の世界にしていくことを目指し、その思いのシンボルとしてつくられたそうです。なぜ鐘をシンボルにしたのかについてガイドの方は「鐘の音は誰かが鐘を叩かなければ鳴らないからです。平和も同じで、自然と訪れることはなく、誰かが行動を起こさなければならないのです」とおっしゃっていました。また、鐘の表面には世界は一つであることを表現する、国境のない世界地図が浮き彫りされていました。私はこの平和の鐘を知って、平和な世の中をつくっていくためには、世界の人々と一丸となり、一人ひとりが平和にするための行動をしていくことが重要であることに気付かされました。

今、私たちが平和に生きていられるのは、被爆者の方々や戦争をなくし、平和な社会が訪れるように今まで尽力してくださった方々のおかげだと思います。これからは、私たちの世代が平和を守っていき、次の世代に平和への強い思いを繋げていきたいと思います。

平和の当たり前

会津若松市立第六中学校　吉　田　新　汰

「あなたたちは今幸せです」これは被爆体験講話で講師が最初に話された言葉です。原爆は14万人の未来を奪いました。子どもの服を脱がせたいのに子どもが痛がって脱がせられない母。失明した母の手を引き、水を探す小さな男の子。川を埋め尽くす多くの犠牲者。ヒロシマの街を一瞬にして地獄に変えたのが原爆です。

私は広島市を訪問し、不思議な気持ちになりました。現在の平和記念公園や平和の鐘は、78年前に原爆を落とされたとは思えないくらい平和そのものだからです。

しかし、ガイドの方の一言でその印象がすべて変わりました。

「私たちが踏んでいるこの地面の下には、今も原爆で亡くなった人たちの骨が埋まっている」

この瞬間、私に衝撃が走りました。白を基調とし草木が生い茂るこのきれいな公園の下に多くの犠牲者が眠っているとはとても信じられませんでした。そして、私は怖くなりました。もしこの世に原爆があり続けたら、また多くの知らない誰かが犠牲になり、悲しみが広がってしまう。もしかしたら、それは自分かもしれない・・・。

今まで何も考えず当たり前のように平和を享受していたことを実感しました。戦争に巻き込まれる恐怖に怯えることなく生活できている今が、どれだけ幸せか考えました。当たり前に食事をし、当たり前に学校に行く。この当たり前がどれだけ幸せなことか。

「あなたたちは今幸せです」

この言葉を胸に刻み、平和が本当に当たり前になる世の中をつくるため、平和の礎となった方々の思いを忘れずに、自分にできることを考えていきたいと思います。

広島訪問をして

会津若松市立湊中学校　岡　島　唯　乃

私は８月４日から、８月６日の三日間で広島訪問をしてきました。この三日間の中で一番心に残った事は、「戦争は悲惨」という事です。

当時、中学生だった被爆者の笠岡さんの話を聞いた時、私はゾッとしました。人があちらこちらで黒くなって亡くなっていて衝撃的だったとおっしゃっていました。たった一発の爆弾で何万人もの人が亡くなりました。それから数日後の８月15日。天皇陛下より、日本が負けて終戦したとラジオで知らされたとき、笠岡さんは「今まで私たちが我慢してたのは一体なんだったの？」「私たちががんばった意味がない。くやしい」と思ったそうです。私は戦争というものを体験した事がないので、終戦が告げられたら喜ぶと思います。でも、その時代の人たちは、「くやしい」という思いが強かったのです。私はその真実に驚きが隠せませんでした。

そして、平和記念資料館では肌がただれた人の写真や水を求めている人の写真など、戦争がリアルに感じられる写真や絵、動画を見る事ができました。

私は社会科の学習でも戦争について学んでいて、戦争については知っているつもりでした。しかし、本当の戦争は私の知っている話や知識よりもはるかに悲惨でおそろしいものでした。

原爆は、人々の体や広島を破壊するよりも先に人間の心にある優しさや尊厳といったものを壊してしまいます。だからこそ、戦争は行ってはいけません。

今回のこの貴重な体験を忘れずに、次の世代には、私たちが戦争の真実について伝えていきたいと思います。

平和への思い

会津若松市立一箕中学校　神　山　美　桜

８月６日、広島に原爆が落とされた日です。この日、皆さんは何を思い、何を考えたのでしょうか。様々な思いがある中で、今の私の思いをここに残すことにします。

私は、戦争や原爆のことに、以前から関心がありました。祖父から話を聞いたり、本を読んだり、知識はあるつもりでした。ですが、平和記念資料館に展示されていたものは、私の知識をより鮮明にするものでした。痛々しい写真や衣服、被害者の方やその家族の行き場のない悲痛な思いが、たくさん綴られていました。戦争を知るということは、知識を得るだけでは足りない、被害者の方や家族、大勢の人の思いを知り、もう一度、自分が戦争について考えた先が、戦争を知ることなんだと思いました。

原爆が落とされて今年で78年目を迎えます。昭和20年８月６日、広島の街に、原爆が落とされ、絶望が降り注ぎました。なぜ可愛らしい幼子が大火傷を負わなければならなかったのでしょうか。なぜこんなにも多くの人が我慢を強いられたのでしょうか。私は最初、親を亡くした子供の姿を見て、立派だと思ってしまいました。残された者として一生懸命に生きることを決意した子供の姿を不覚にも立派だと。でも、それは違うのではないか。戦争がなければ、原爆がなければ、親を亡くしても立派に生きる生き方をしなくても良かったのです。戦争は、大切な命を奪います。人として奪ってはならないものを奪います。

過ちを繰り返さないためにも、私たちができることは何でしょうか。それは、後世にも伝えていくことです。私は、何百年後も戦争をしてはいけないという思いが消えないように、この惨劇を伝えていきます。私たちの周りでは、知らなければいけないものが見落とされています。それを知り、伝えることが平和への第一歩です。

広島市訪問を終えて

会津若松市立大戸中学校　井　上　銀　河

先日僕達は広島市を訪問し、多くのことを学べたと断言できる。そして、平和に対する考えを大きく改められたと思う。ここでは、その中でも特に印象に残ったことについて、いくつか挙げさせてほしい。

一つ目は、平和記念資料館の見学だ。ここでは、実際に戦争で亡くなったり傷ついたりした人々の所持品が展示されていた。見ただけで思わず涙が出てしまいそうな、当時の人々が感じた辛い思いや記憶が流れ込んでくるかのような、そんな品々ばかりだった。特に、黒く焼け焦げた弁当箱の展示。その側に書かれている説明を見たとき、僕の目には涙が出ていることに気づいた。僕よりも小さな男の子。前日に採れた野菜で作られた弁当を何よりも楽しみにしていたそうだ。しかし、その弁当を食べることはついに叶わなかった。あの日落とされた一発の核兵器によってこの子の小さくも尊い夢は打ち壊されてしまった。核兵器は年齢性別関係なく人の夢や希望を無慈悲に消し去ってしまうのだと改めて感じた。

次に、ヒロシマ青少年平和のつどいで聞いた被爆体験講話についてだ。特に印象に残ったのは、「家に帰ってただいまと言っても誰もおかえりと言ってくれなくなった。あの日から」という言葉だ。言葉の重みが違う。胸の中に何か重いものが乗ったような感じだった。言葉では言い表せないような、強く心の中に残る、そんな感じでもあった。普段何気なく交わしている「ただいま」「おかえり」が交わせない日々を誰が想像できただろうか。こんな当たり前の日々さえ送ることのできなかった当時の人々の気持ちは容易に想像できることではない。ただ、考えるほどに涙が思わず出てきてしまうような気持ちになることだけは確かだった。みんなも考えてみてほしい。家族が何気無く迎えてくれる。そんな日々の大切さを。戦時下の人々が抱いた想いを。

核兵器は全てを奪い去る。夢も、希望も、光も、恋心も、生活も、かけがえのない命でさえも。それは戦争もだ。僕らから何もかも奪っていく。これ以上尊い夢を、希望を、これ以上儚い命を、心を失わせてはいけない。核がある限り、戦争がある限り、この世界に幸福という二文字は二度と訪れない。日本に住む我々も他人事だと思ってはいけない。78 年前、広島の地で 14 万人の命が一瞬にして消え去ったのだ。核や戦争。そんなものいらない。平和であること。それが何よりも大切なことだ。戦時下の人々は、来るかも分からない明日のために今を必死に生きてきた。我々で

その希望を受け継いでいくこと。それが何よりも人々が望んだことだと僕は思う。核も戦争も、今すぐに消し去らなければならない。一人でできることは少ない。だが人間は力を合わせて世界を変えられる。僕も前を向いて、核なき世界が一秒でも早く訪れるよう全力で今を生きていきたい。

平和の尊さ

会津若松市立北会津中学校　小　林　桃　寧

1945年８月６日、広島に原爆が投下されて78年経った今、私は広島を訪問しました。

高層ビルが立ち並び、路面電車が通る栄えた広島の街に、まるでタイムスリップしたような建物が堂々と建っていました。その建物とは。そう、原爆ドームです。爆心地から約160メートルしか離れていないのに、原爆ドームは崩れず残っていました。窓ガラスは全て割れ、ドーム部分は焼け焦げてしまっていましたが、78年経った今でも残っていることに奇跡を感じました。実際に見ると迫力に目が奪われてしまいます。また平和記念資料館は、思わず目をそむけたくなるような写真や絵がたくさんありました。原爆は多くの人の命を奪い、苦しめたことを改めて実感しました。

私がこの三日間で一番印象に残っていることはヒロシマ青少年平和の集いでのワークショップです。グループごとに、「あなたにとって平和とは何か」と「なぜ核兵器はなくならないのか」の二つの議題を話し合いました。あるグループが「あなたにとって平和とは何か」の議題に「図書館」と発表していました。図書館では本の貸し借りができることから、経済がまわっていることがいえます。また図書館は国籍も性別も関係なくみんなが利用できることから、国際協調主義であることがいえます。この二つの点は平和をつくる柱だと考えたことから、平和とは図書館だということがいえます。その発表をきいて私は感銘を受けました。地方から来た同世代の子と戦争や平和、核兵器について考えたり話し合ったりすることはあまり機会がないので良い経験でした。

平和記念式典に参列し、広島市長の平和宣言を聞いて、私は78年前のあの地獄をもう二度とみないために、核兵器をこの世界からなくさなければいけないと強く思いました。そしてこの事を家族や友達に伝え、多くの方々に知ってもらいたいと思いました。

僕の使命

会津若松市立河東学園　武　藤　青玖亜

初めて訪れた広島は、都会という言葉がぴったりな高層ビルが並び、路面電車が走る素敵な街でした。78年前の夏、この場所に核爆弾が投下されたとは思えない風景で不思議な感覚になりました。ビルが並ぶ中、戦時中にタイムスリップしたかのように建つ原爆ドーム。爆心地から約160メートルという近い距離にも関わらず、奇跡的な形で残っている様子は当時の核爆弾の威力や戦争の悲惨さを伝えるべくして建っているように感じました。

原爆ドームからほど近い平和記念資料館では、核爆弾によって被爆して焼けただれ、皮膚が垂れ下がった人や、あまりの熱さに川に飛び込み亡くなった人の絵など、目をそむけたくなるような資料を見ました。核爆弾の悲惨さを肌で感じ、恐怖を覚えました。

核爆弾や戦争は尊い命を奪い、悲しみや憎しみしか生み出さない悲惨なものだと改めて感じました。

最近ニュースで耳にする「抑止力」という言葉。参加したヒロシマ青少年平和の集いでも、取り上げられていたワードでした。核を核で抑制する世界では、核兵器がなくなるはずがありません。世界で唯一の被爆国である日本に暮らす私たちから、核兵器廃絶を求め、その輪を広げることは大変意味のあることだと思います。そして、被爆地広島を知った僕には、核兵器や戦争の悲惨さを伝え、核兵器廃絶の輪を広げていく使命があります。遠い外国の地では今もなお、戦争が起きていて、平和とはかけ離れた生活をしなければならない人たちが大勢います。国が違えば、信じる宗教が違うように、核兵器や戦争に対する考え方も違います。ただ、無差別に尊い命を奪う核兵器や戦争は絶対に反対です。誰もが平和な日々を送れることを願って、僕は、僕の使命を果たしていきます。

広島訪問を終えて

会津若松ザベリオ学園中学校　大　塩　袖　司

僕達会津若松市13校の中学三年生13人は８月４日から６日までの三日間、広島県を訪問しました。広島県は様々な産業が盛んで県庁所在地である広島市は政令指定都市に制定されています。この広島市に太平洋戦争中である1945年８月６日午前８時15分、原子爆弾が世界で初めて投下され約14万人もの人々が亡くなりました。

僕たちは広島で原子爆弾が投下された爆心地にあり、78年経っても保存されている原爆ドーム、平和記念公園内にある平和記念資料館、広島市役所では被爆者の笠岡貞江さんにお話を聞き、全国各地から集まった学生達と平和についてのワークショップに参加しました。最終日には岸田総理も参加した平和記念式典に参列をしてきました。

僕はこの三日間で特に二つのことが印象に残りました。一つ目は二日目に行った平和記念資料館です。僕はこの場所を訪れたのは三回目でしたが、その時に見た皮ふが焼けてただれ落ちた人形の姿や真っ黒にこげたランドセルの姿はいまでも印象に残っています。2019年にリニューアルされた平和記念資料館でしたが当時のような人形や模型はなくても、戦後の写真や映像がデジタル技術によってより戦争の悲惨さや死の怖さがリアルに展示されていて、とても心に残りました。

もう一つは最終日に参加した平和記念式典です。そこでは戦争で亡くなった方々への追悼、戦争を二度と繰り返さない誓い、広島から世界へ向けた訴えの場に参列してきました。いつもはテレビでしか見たことがなかった平和記念式典に参列することができて、広島県民だけでなく日本国民一丸となって思いをよせるその瞬間を肌で感じることができて感動しました。

この広島訪問で多くの体験を通して78年経った今でも苦しんでいる被爆者の方々がいらっしゃること、命の尊さ、様々な平和の形について考えるきっかけを得られ貴重な時間となりました。これからも78年前、広島で起きた出来事を忘れず、後世に語り継いで二度と同じようなことがおきないようにするのが今を生きる僕達の役目なんだと実感しました。

「繋がれた」バトン

福島県立会津学鳳中学校　髙　橋　百　華

1945年の８月６日、広島に原爆が落とされ、そこから78年後の広島に、私は訪れました。主に原爆ドーム、平和記念公園など様々な施設を見てまわりました。その中で印象深かったのは原爆ドームと平和記念資料館です。

原爆ドームを目指し、素敵で活気がある広島市を歩いていました。ここに原爆が落とされたなんて嘘のようだなと思わせるほど綺麗な街に心が奪われました。そんな中歩き続けると平和記念公園のゲートが現れました。それはとても美しくまるで美術館みたいだと思いました。中に入り再び歩き出すと、目を疑うような建物が聳え立っていました。それは、原爆ドームです。そこだけ、時が止まっていました。みよ、これが原爆の恐ろしさだと言わんばかりにそこにいました。そもそも、78年経った今でも生き残っている事がすごいなと感じました。それは、原爆の恐ろしさを「繋ぐ」ためにたくさんの方々が尽くしてくださったからなのでしょう。

平和記念資料館では想像を絶する遺品の数々が並べられていました。無茶苦茶になった衣服、楽しみにしていたお弁当、タイヤがねじ曲がった自転車、元の形がわからない銅像。この世のものではないのではないかと錯覚させられるものばかりでした。また、人影の石といってレンガに人がいた影がうつったものを見ました。私は中学二年生の時に被爆体験講話を受けました。その時に、あまりに光が強すぎて人の影が地面に焼きつけられたのだと聞きました。私は信じられませんでした。でもその現実を目の当たりにした時、あぁ本当なんだという言葉しかでてきませんでした。驚きで、その場に立ち尽くしてしまいました。そしてこの資料館では亡くなった方々のお写真や思いが展示され、大変心を揺さぶられました。焼けただれて真っ黒になった皮膚、死の斑点、多くの方が水を求め集まる川、治療を望み大行列を作る様子。展示の説明にも書いてあった通り、まさに地獄でした。でもそれも、たくさんの方々が戦争の悲惨さや「平和」の尊さと儚さを私たちに「繋げて」くださったんだろうなと思いました。

この三日間を通して感じたことは、「繋がって」いるということです。「平和」を「繋ぐ」ために、たくさんの方が私たちに「平和」について精一杯教えてくださいました。今度は私たちの番です。今回感じたことを多くの方々に「繋いで」、「平和」のバントを絶やさないようにしていきたいです。そして皆さんも、「平

和」とはなんだろうと考えてください。もし、今、この状態が、あなたにとっての「平和」ならば、感謝し、周りの人にもそのバトンを「繋げて」ください。